

「あり方」を進路につなげる高校事例

社会のなかで自分がどうありたいかを思い描くことは、情報はたくさんあっても実感として得たものはまだ少ない高校生には難しいものです。生徒が自分の思いをもって踏み出せるように、学校ができることは。2校の先生方にお話を伺いました。

Case 1

連携企業での育成型アルバイト「キャリアシップ」や丁寧な面談で、生徒が自分と向き合う

錦城高校（兵庫・県立）

実社会での成功・失敗体験 どちらも学びにできるように

兵庫県立錦城高校は、「自分を見つめなおし、学びなおし、自分自身の生き方や自分の在り方を探してみたい」と考える生徒の入学を歓迎する夜間の定時制高校だ。不登校や勉強に意味を見出せなかった経験をもつ生徒が、社会体験や面談を通して自己理解を深め、今後のキャリアを見据えていく。

同校のキャリア教育の特徴の一つが「キャリアシップ」だ。学校と企業が打ち合わせてから、生徒がその企業でアルバイトをする（[図1参照](#)）。協力するのは地元企業24社で、現在も連携先を開拓中。校内には授業のない昼間に一般のアルバイトをする生徒も多いが、その体験との違いを、キャリア教育部の上村耕平先生は次のように説明する。

「一番大きいのは、生徒の特性をわかったださっている企業の下で、仕事を体験できることです。コミュニケーションや継続に苦手

意識があり、アルバイトに踏み出せずにいた生徒も挑むことができます。また、互いの相性が合えば卒業後に正社員にすることも見据えてくださっているので、単純作業で終わらず、スキルを磨くこともできるのです」

同校は毎年春に企業ガイダンスを行っており、その後のアンケートで協力企業に興味を示した生徒に、キャリアシップをやってみないか声をかけるという。また、アルバイトなどの社会経験がない生徒に対して、担任が話をもちかけることもある。

キャリアシップをやってみても、続かずに終わる生徒も当然いる。だが企業の理解があるので、この取組ではその失敗もプラスに捉えていく。

「自分にこの仕事は難しい、と生徒が感じ



左より、4年主任の清家大雅先生、キャリア教育部の上村耕平先生、佐藤恵先生

たなら、社会に出る前にそれがわかって良かった。成功・失敗を含めて『わかる』ことを学びとしています。卒業生の調査では、就職後に『こんなに大変だと思わなかった』『思っていた仕事と違った』と感じると、離職しやすいという結果が出ています。本校がキャリアシップに力を入れるようになったのは、そうしたミスマッチを防ぎ、生徒が自分に合ったキャリアを歩めるようにするためなのです』(上村先生)

このほか、1年生から4年生にかけて、総合的な探究の時間やロングホームルームの時間に、生徒が自分を理解し、地域や社会を知る取組も行っている。また、学期ごとに面談を行い、3年生からは就職や進学を見据えた面談も丁寧に行っている。

周りがどうかではなく、 本人がどうしたいかに迫る

その面談の際に、キャリア教育部の佐藤恵先生や、4年主任の清家大雅先生は、生徒が「本当はどうしたいか」を確認することを大事にしているという。

「親はこう言っている、学校が紹介してくれたから、と彼ら彼女らなりに気を使い、なかなか本心を出せないことも多いのです」(佐藤先生)

「早く決めて楽になりたい、と考える生徒もいます。ですが、今までの例でも、親や担任の顔をうかがい、流されるままに決めた生徒は、結局続かないんです。最後の決定を自分以外にゆだねたので、うまくいかないと『親や先生のせいでこうなった』とどうしても

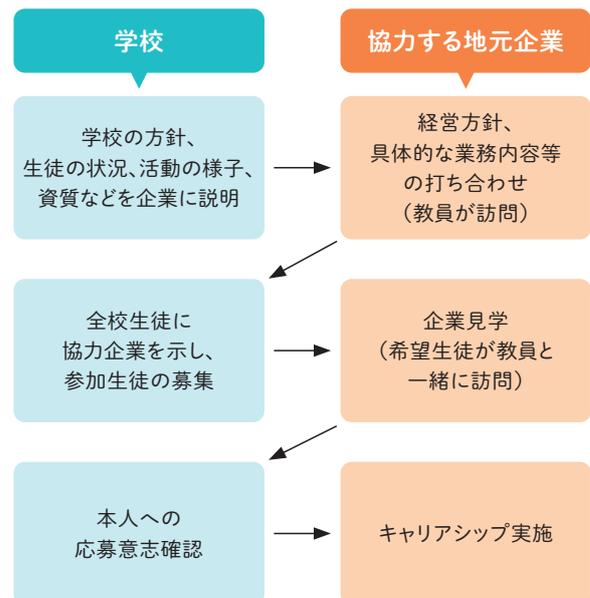
責任転嫁したくなり、選択した道から降りてしまう。ですので、まずは生徒の思いを聴き出そうとしています」(清家先生)

ではどうすれば生徒の本心に近づけるのか。佐藤先生は、普段の教科授業から「どうせ、という言葉を使う人にならないで」と意図的に言い続けている。自分の前では照れ隠しせず本音を出していい、と生徒に感じてほしいからだ。清家先生は「待つ」ことを重視している。「間違っただけでも曖昧なことでもいいから自分の思いを出してくれ」「親がどう思うか不安とか、悩みがあればそこは一緒に考える」と背中を押しながら。

だが、待つといってもリミットはあるはずだ。もし卒業までに進路が決まらなかったらどうするのか。

「進路指導としては、支援の至らなさを反省したいと思います。ただ、卒業までに進路が

図1 キャリアシップのイメージ



アルバイト契約からスタート→最終的には正社員になることもある
(受け入れ期間は敢えて決めない)

決まらなかったとき、その生徒が人生すべてを否定されたような感覚になってしまうのは、違うと感じています」(清家先生)

その思いは、生徒のキャリアシップに付き添い、地元企業の人たちと話を重ねるなかで強まったという。

「『経歴に空白のある子や、立ち上がれない期間があった子でも育てていきたい』と、地元の子に寄り添ってくださる企業も少なくなかったのです。生徒によっては『いつまでに決めないとダメだ』『選択を間違えてはいけない』と理想が高くなりすぎていることもあります。それだけに、こんな生き方もあるよね、と別の見方もできるようにし、『周りとの比較で自分を傷つけて終わる』ことがないようにしたいです。最後は『自分が自分を認めてあげられるかどうか』だと思うのです」(清家先生)

必要とされたことも 悩んだことも糧にして

キャリアシップや面談は「一朝一夕では成果が出ない」(佐藤先生)ものでもある。それでも回を重ねるほど、変化は生まれていくという。

例えばキャリアシップに参加したある生徒は、アルバイトをした企業に就職することを決めた。彼がその選択に踏み出せたのは、2年近くバイトするなかで、適性に合った仕事をどんどん任せてもらえるようになり、「自分はこの会社に必要とされている」と実感

キャリアシップでは製造や介護など、一般のアルバイトでは経験しづらい仕事にもふれられる。就業実践中にトラブルが起きたときや、生徒がつまらそうなときに、学校と企業が連携してフォローできる良さもある。



できたからだった。

1年生のときに働きたくないそぶりを見せていた生徒は、学年が上がるにつれ「家でコツコツやる仕事が向いていると思うからやりたい」と佐藤先生に相談できるようになった。企業見学などに挑むことにはまだためらいがあり、今はやりたいことに向かう次のステップを検討中だ。

「他人と比べてしまう自分をどうすればなおせますか」と質問してきた生徒もいる。佐藤先生は、自分も高校生のときにその葛藤を抱えていたことを伝え、でも自分の人生の主人公は自分であり、ならばどうありたいかを、話し合っている。

「高校生のときに悩みと向き合うことは、人生にとってプラスに働くこともあると思うのです。だから、今はある意味でチャンスなのだと思え、本人が壁を乗り越えられるように支えたいと思っています」(佐藤先生)

学校
データ

1951年創立／普通科／生徒数153人(男子83人・女子70人)／4年ないし3年で卒業できる定時制高校。
生徒一人ひとりに対するきめ細かな指導とキャリア教育を重視。令和3年度キャリア教育 文部科学大臣表彰 優良校受賞。

地域を舞台に、多様な人と関わりながら 自分のあり方を発見する課題解決型学習

吉城高校（岐阜・県立）

学校外でも挑戦できる環境で 知らなかった自分を発見する

岐阜県立吉城高校は、進学から就職まで、生徒のさまざまな進路希望に応えるために、複数のコースと多様な選択科目を備えた単位制高校だ。同校は2015年度より、校内にキャリア推進部を立ち上げて、「吉高地域キラメキ(YCK)プロジェクト」という取組を推進してきた。「地域を舞台に、自分はどうか、どう生きたいのか、自分のキャリアと切り離せない課題を発見し、解決していく力を身につける」ことを目標とする活動だ。

キャリア推進部の谷口智康先生や近藤恵子先生は、その活動の魅力をこのように語る。

「本校に赴任するまでは、『高校生の活動』といえば、勉強と部活動、生徒会活動を中心に考えていました。ですがこの学校では、地域のなかで生徒がチャレンジできる活動も本当にたくさんあるんです。そのなかで生徒が『やってみたら楽しかった』『難しかった』という新たな発見をすることも多く、『ではそれを踏まえて今後どうしたいのか』と、自分のあり方を見つめることにもつながっていくと感じています」(谷口先生)

「生徒が地元の魅力や興味あるテーマを発見するだけでなく、その生徒自身が、学校

にいるときはまったく違う顔を見せることも少なくありません。授業中はいつも静かにしていた生徒が、地域の方々と楽しそうに話していたり。生徒の別の一面を知ることができるので、一人ひとりの進路を一緒に考えていくうえでも有意義だと思います」(近藤先生)

具体的にはどんなことに取り組んでいるのか。

例えば、1年生の総合的な探究の時間では、「進路探究」をテーマに、地域の大人と語り合う。保健師や酒造家、エンジニア、薬剤の研究者、ドローンパイロット、地域おこし協力隊など、社会人20名前後を招き、生徒が少人数に分かれて囲むという。この活動を牽引しているのがキャリア推進部の野道達也さんだ。

図1 課外活動プログラム

課外活動プログラム 2022 (詳細等は変更される可能性があります。申し込みは2022年4月1日)

①おまわりプロジェクト 4/17(土) 9:00-11:00 「地域の魅力を発見し、自分自身の成長を促す」を目的とした、地域の魅力を発見し、自分自身の成長を促す。	②学長による夏の特別補習 7/28(日) 12:45-15:30(補修授業) 学長による夏の特別補習。	③小学生サイエンス教室 8/6(日) 9:30-12:00 小学生サイエンス教室。	④学習サポーター 8/14、17-19(土曜) 学習サポーター。
⑤和光園清掃活動(緑の寄付) 10/14(土) 9:00-12:00 和光園の清掃活動。	⑥修学・短歌で飛騨を盛り上げよう 10/23(土) 9:00-12:00 修学・短歌で飛騨を盛り上げよう。	⑦卒業生で飛騨を盛り上げよう 11/13(土) 9:00-12:00 卒業生で飛騨を盛り上げよう。	⑧飛騨の先達を盛り上げよう 7/23(土) 9:00-12:00 飛騨の先達を盛り上げよう。
⑨郷土料理を学ぼう 11/1(土) 9:00-12:00 郷土料理を学ぼう。	⑩飛騨学園関係者内所 ヒグズケ! 11/1(土) 9:00-12:00 飛騨学園関係者内所 ヒグズケ!。	⑪子ども食堂お助け隊 11/1(土) 9:00-12:00 子ども食堂お助け隊。	⑫飛騨の先達を学ぼう 7/23(土) 9:00-12:00 飛騨の先達を学ぼう。

課外活動プログラムや2年生の探究活動のなかには、飛騨市長が講師を務めるワークショップもある。市長が「自分にとっての理想のまちのあり方」を示し、その「理想」と「現実」のギャップを課題として捉え、解決策と一緒に考えるのだ。そのプロセスは、生徒が課題解決型学習に応用していく手法でもある。ほかに、小学生の学習サポートや子ども食堂の手伝い、写真や俳句によるまちの活性化など、さまざまなプログラムが用意されている。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト: リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.446)

「会は年2回開催し、2回目のときは講師の方に、これまでの人生のアップダウンを折れ線グラフで示したものの、いわば人生の転機が一目でわかるものも用意していただきます。それを基に生徒から質問もし、自分のキャリアをどう切り拓いていくかを一緒に語り合うのです」(野道さん)

また、2年生の総合的な探究の時間や、学校設定科目「ESD 地域課題探究／国際理解探究」では、生徒たちが地域に出て課題解決に挑む。具体例をあげれば、郷土料理による地域活性、ご当地キャラの考案、地域の空き家の活用、外国人観光客も視野に入れたまちづくりなどだ。

さらに土日や夏休みには、[図1](#)のような課外活動プログラムにも参加できる。市役所や地元のNPO法人と連携して開講しているもので、教育や福祉からまちづくりまで、幅広いジャンルの活動に挑めるのだ。

生徒の心が動いたところから 課題解決に向かう学習に

もっとも、YCKの活動には課題もあった。ともすれば「活動あって学びなし」になりかねないことだ。

プロジェクトに発足当初から関わってきた鈴木泰輔先生は、2021年に生徒および教員にアンケートを実施。すると、生徒の自己認識でも、教員の生徒に対する認識でも、

前列左より、地域創生キャリアプランナーの野道達也さん、キャリア推進部長の鈴木泰輔先生。後列左より、キャリア推進部の谷口智康先生、校長の野々山伸一先生、キャリア推進部の近藤恵子先生



「体験したことから視野を広げたり、学びを深めたりする部分はまだちょっと弱い」という結果が出たという。

だから同校は、生徒たちが自分のなかにある思いを具体化していくことや、学んだことを言語化していくことにも力を入れてきた。

「例えば地域の探究活動は、課題発見から始めると、どうやって課題を見つければいいのかわからず、自分がやりたくもない課題をひねり出してしまいがちです。そこで、まずは地域のなかで『自分が魅力を感じるもの』を発見し、それを持続・発展させるような『自分の理想』も思い描き、どうすればそれを実現できるか、というところから課題を見出す設計にしました([図2も参照](#))。また、生徒が『1年後に自分はどうありたいか』を思い描いてから活動に取り組むようにもしています」(鈴木先生)

このほか、課外活動プログラムでも事前・事後に自分を振り返り、年度末に行う活動全体の報告会でも、この先の展望や、自分の成長まで言語化するように促している([図3](#))。

人との関わりを通して 自分のあり方が定まっていく

取組を進めていくと、汎用的な資質・能力を測るテストの結果でも、生徒の「課題発見力」や「情報分析力」が、春先よりも年度末のほうが着実に高まるようになったという。

自分が何を大切に、どうありたいかを、進路と結びつけながら描けるようになった生徒も増えている。

ある生徒は、郷土料理に魅力を感じ、「今後も受け継がれるようにしたい」という課題意

識から、得意のイラストを生かして地元の惣菜店や飲食店を紹介するパンフレットを制作。入学当初は美術の専門学校に興味をもっていたが、「情報やデザインの力で地域の魅力を発信したい」というより明確な思いを抱くようになり、大学の情報学部に進学した。

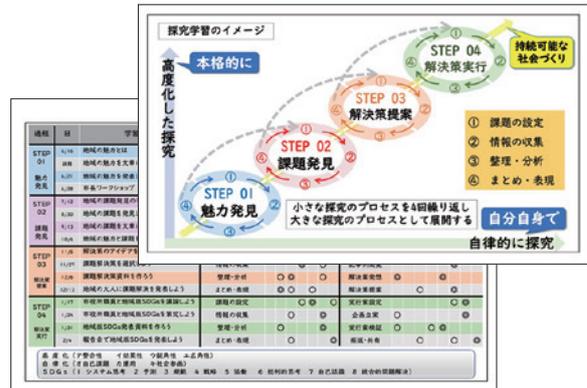
また別の生徒は、課外活動プログラムで、「ヒダスケ!」という地元・飛騨市の「お助け」を「ワクワク」にする（楽しみながら助ける）取組に参加。「面白いのになぜみんな参加しないのか」という課題意識をもち、生徒へのアンケート調査から企画の立案・実施まで進め、10人以上も参加者を増やすことに成功した。しかしその過程で「人にアクションを起こしてもらうことの難しさ」も痛感し、だからこそ「公務員になって多様な立場の人と行動を共にしたい」と思うようになり、大学の法学部に進学した。

そのように、「付け焼刃ではない思いが根を下ろしてきた」ことに、野々山伸一校長も手ごたえを感じている。

「地域の活動を通して、生徒たちは多様な人から褒められ、認められることを経験し、『自分の良さってこれなのかな』と思える部分が発見してきました。そして『その自分にできることや、挑戦したいこと』まで見出す生徒が増えています。となると、進学や就職に向けた面接の指導などは行うにしても、下地はもうできているわけです。だから、志望先でやりたいことを突っ込んで問われても、急ごしらえ

の動機ではないので、ボロが出ることもなく、自分の思いをちゃんと話せます。自分のあり方や、自分のやりたいことを、自分の言葉で語れるだけのたくましさを培ってきた。そのことが、進路選択においても、社会に出てからも、本人の力になると思うのです」

図2 探究活動のプロセス



地域の探究活動では、SDGsにもふれていく。「地域の魅力の維持や発展を考えると、持続可能な社会づくりにもつながり、学んだことはこの先どこで暮らすしても生かせる」(鈴木先生)ことを感じてほしいからだ。

図3 自己を見つけて言語化する工夫

課外活動プログラムの事前・事後学習に活用するワークシート。参加した理由から、活動中に意識することや、活動で得たものを言語化していく。野道さんが中心となって毎年のように改善を加えているという。

全校で行う報告会に向けて活用するワークシート。背景や目的から、取り組んだ内容、結果、展望、自分の成長まで、活動を総合的に振り返る。



学校データ 1948年創立 / 普通科・理数科 / 生徒数319人(男子155人・女子164人) / 2020年度より、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の事業特例校の指定を受ける。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト: リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.446)